

# アーレント政治哲学における〈支配の問題〉

——「制作」の政治から「行為」の政治へ——

大 澤 美 智

## はじめに

政治哲学とは「誰が支配すべきか」という問いに回答を与える試みであった。プラトンやアリストテレスは支配者の数で政治形態を分類し、最良の形態を模索した。政体の本質と原理を分類したモンテスキューも、支配被支配と無関係な政治形態を提示しなかった。これらのような「支配」に囚われた政治哲学を強く批判する理論家がハンナ・アーレント（1906-1975）である。

アーレントは、政治哲学の伝統的な支配概念を「政治とはすべて支配の形態であって、支配と被支配、命令と服従を実定法にもとづいて規整することが法治国家の本質に属するのだ、とする考え方」（VA：281）と規定する。彼女の求める政治のあり方は、支配することも支配されることもない状態である。つまり政治的支配が否定されている。彼女の定義では、政治とは他者との協働や議論を含む自由な「行為」（Handeln）である。経済的利害の調停や政策の決定は行為には含まれず、複数の多様な人間が共に生きることこそが政治であるとされている。

政治的問題とは誰が支配すべきかを考えることではない。アーレントは、平等を謳う近代の民主主義や、彼女が直面した全体主義を一つの支配形態として考える。さらに彼女は、制御可能な政治制度の制作を目的とするような政治科学にも、支配の概念が内在すると指摘する。アーレント自身は哲学者ではなく政治理論家と呼ばれることを望んだ<sup>①</sup>。ただ、その思想が政治的であると同時に哲学的であることは否定できない。彼女の学問的背景のみならず、思想自体が政治哲学や哲学として理解されることは少なくない。『活動的生』<sup>②</sup>の主題は、「活動しているときわれわれは何をしているのか」（VA：14）である。寺島（2006a）は、アーレントが人間本性ではなく人間の実存の条件を探求しているという点で、彼女を実存主義の流れのなかに位置付けることができると指摘している<sup>③</sup>。森（2008）はアーレントの思想には「誕生の哲学」と呼べる側面があると認識している<sup>④</sup>。さらに橋爪（2022）は「アーレントの哲学は、狭義の「政治

哲学」ではなく、私たちの経験のもっと広い領域を対象とする「哲学」なのだ」（橋爪2022：5）とまで主張している。

本論文では、彼女の主要な関心である〈支配の問題〉について、人間の共生という政治的側面だけでなく人間性という哲学的側面から考察する。なぜ彼女は政治における支配概念を否定するのか、彼女の考える〈支配の問題〉とは何であるかを示すことを目的とする。

第1章では、アーレントの全体主義分析を確認する。「無人支配」は一見無支配のように見えるが、実際それは「誰でもないもの」によって支配される形態であり、全体主義の如き形態になりうる危険を示す。

第2章では、伝統的な政治哲学へのアーレントの批判を確認する。とりわけその批判の中心が、プラトンが「行為」を「制作」(Herstellen)という活動に置き換えようとした点にあることを明らかにする。

第3章では、行為の政治が追求される理由を、予測不可能な出来事存在と出生性(Natalität)という概念から考察する。またカール・ポパーとの比較から、アーレントの独創性が出生性の哲学に基づく政治思想にあることを示す。そして、彼女にとっての〈支配の問題〉とは、究極的には出生性という条件の破棄による人間性の消滅につながりうる点にあると結論付ける。

## 第1章 全体主義の要素としての「無人支配」

本章では、アーレントによる「無人支配」形態への一批判を示す。彼女は『全体主義の起原』で官僚制を全体主義要素の一つと分析し、『活動的生』では官僚制を無人支配と結びつけた。そこで、官僚制に関する彼女の主張を手掛かりに、無人支配がどのような支配形態であるのかを明らかにする。

### 第1節 無人支配

政治哲学において、支配形態は分類され、民主制や共和制などあらゆる政体が生じた。この分類に、アーレントは「無人支配」という形態を加える。彼女は、僭主制や専制に代表される一人支配が、近代社会では最終的に誰も支配も統治しない形態に変容したと考え、この形態を無人支配と呼ぶ。彼女が強調するように、無人支配は「非-支配」ではなく、「無人」すなわち「誰でもない者」(Niemand)による支配を意味する。「誰でもない」ということは「いかなる人格にも結びついていない」(VA: 51)状態である。そして彼女は、官僚制は無人支配であると述べる。

われわれはこの無人支配という現象を、あらゆる国家形態のなかでも「最も社会的」な形態、すなわち官僚制から、あまりにもよく知っている。(VA: 51)

『全体主義の起原』で、官僚制は「政治に代わって行政が、法律に代わって命令が、決定者の責任が問われる公的・法的決定に代わって匿名の処分が登場する支配形態」(ET: 405)であり、「法の支配とは反対の、命令の体制 (Regime)」(ET: 516)と定義されている。つまり、官僚制は匿名の、無人による支配である。

アーレントは、無人支配は時に「最も残酷で最も僭主的な支配形態の一つ」(VA: 51)になりうると主張する。それは「孤立」(Einsamkeit)という現象に関係している。孤立とは、公的領域から追い出され、他者との公的な関係を失った状態を意味する。彼女によれば、僭主制は孤立化の原理に基づく「暴力と無力の結合」が見られる国家形態である (VA: 255, 256)。

アーレントが政治哲学の伝統を修正したと評するモンテスキューは、政治形態の性質と原理により共和制・君主制・専制 (僭主制) の三つに分類した。君主制と専制は合法かどうかだけで区別されるのではなく、前者は名誉心、後者は恐怖によって支えられていることで区別される。アーレントはモンテスキューの理論を整理しながら、「恐怖は本来、行為の原理ではなく、反対に、行為し得ないという絶望なのだ」(ET: 973)と述べ、それが一種の反政治的原理であると主張する。そして、彼女は僭主制の第一の特徴を、権力 (Macht) の欠如を意味する「無力」(Ohnmacht)と考える。彼女にとって、権力は行為する人びとの相互共存においてのみ生じるため、権力を諦めた人とは「孤立を求めこの共存に参加しない者」(VA: 254)である。したがって、無人支配の問題は、単にそれが一人支配の変容であるということではなく、それが人々に他者との公的なつながりを放棄させ孤立の状態を要求することにある。

さらに、無人支配が最も残酷で僭主的な支配であることについて、『政治の約束』で以下のように述べられる。

専制的な権力は伝統によって恣意的権力だと定義される。そしてそもそもこれは、説明を与える必要のない支配、つまり誰に対しても何らの責任をも取る必要のない支配を意味していたのである。同じことは匿名による官僚制の支配についても当てはまるが、その理由はまったく異なっている。官僚制においても、説明を求める多くの人々がいるのだが、誰も説明などしない。なぜなら「匿名」に責任を帰することはできないからである。(PP: 77)

ここでは、無人支配としての官僚制には責任を負うことのできる主体が存在しないことに着

目されている。誰でもないということは「いかなる人格にも結びついていない」(VA : 51) 状態である。「人格」(Person) とは、ある人が「誰であるのか」(wer) ということであり、各人の持つ比類のなさを意味する。誰でもないものが責任を負うことができないのは、行為が不可能だからである。アーレントは行為が「第二の誕生」のようであり、それによってわれわれは「出生の事実に対する責任をいわばわが身に引き受ける」(VA : 215) と述べている。「出生性」は行為と密接に関係しており、行為とは新しい始まりを世界に挿入することである。つまり責任とは出生性および行為、そして人格に結びついているのである。

行為には二つの要素があり「言論」はその一つである。行為が人格を開示することができるのは、必ず言論が伴うためである。情報伝達のための言語使用とは異なり、言論では行為者が「誰」であるかを表現することができる。行為のもう一つの要素は「始まり」(Anfang) である。人間は行為によって新しい始まりを生み出すことができ、新たな政治体を創設することも可能となる。アーレントは、アウグスティヌスが始まりを示す言葉として、世界の始まりである principium と人間の始まりである initium を区別している点に注目する。行為によって生み出される始まりは initium である。

行為はつねに他者によって見られ聞かれる必要がある。それゆえ、行為が十分に展開される場所では、複数の異なった人格が必ず現われる。これが「複数性」(Pluralität) という人間の条件であり、比類なき人格が複数存在することを意味する。つまり、行為が展開される公的領域では、複数性ゆえに全く同じ人間が存在することはない。

だが、この誰でもないということ、すなわち、上流社会のサロンにおける一般的な意見の仮説上の全員一致や、経済的な社会的利害の仮説上の画一性は、いかなる人格にも結びついていないゆえに、まさしく専制的に支配する。(VA : 51)

人格的要素が喪失した誰でもない状態は、画一化と関係している。経済的社会は、人々がある利害に基づいて行動するよう要求される社会である。文化的社会では、社会的地位にふさわしい態度を要求されるような正常化、画一化がある。ここでは、人格を開示する行為は似たりよったりのふるまいである「行動」(Sich-verhalten) にかわり、結果、画一化した匿名の個人の寄せ集めが形成されてしまう。

匿名の誰でもない者は、行為ではなく行動する。責任は人格を持つ人、つまり行為する人に結びつく。他者の行為に対して自らの行為で応答することが責任を引き受けることであり、人格が失われた匿名の状態では行為し責任を負うことは不可能である。それゆえ、無人支配において責任を負える人間は存在しないのである。

## 第2節 無人支配と全体主義の関係

アーレントは「官僚制を全体主義支配と勘違いしてはならないだろう」(PP: 78)と指摘する。彼女が官僚制を全体主義の要素に含めたのは、「官僚制下の人間の意識的特性に全体主義的傾向が見られる」(寺島1990: 127)からである。アーレントが全体主義の諸要素を分析したのは、それが新しい現象でありながらも「昔ながらの要素」や「非全体主義のさまざまな状況<sup>⑤</sup>につながる要素」が混在しているからである。

アーレントにとって、全体主義を理解するために最も重要なことは、それが「先例のない現象」だということである。それゆえ、彼女は全体主義がこれまでに見られてきた専制や暴政のような支配形態とは異なることを強調する。暴政と比較して記述された彼女の全体主義理解は次のように定義されうる。

(D1) 全体主義の本質はテロルである。

(D2) 全体主義は公的領域と私的領域を破壊する。

(D1) についてリンス (1995) は、他の政治科学者による全体主義の定義と比べて、アーレントの定義はテロル (Terror) の要素が中核的であることを指摘している。<sup>⑦</sup> 暴政では支配者が自身のためにテロルを手段として用いる。一方全体主義では、もはやテロルは単なる支配のための手段ではない。「テロルというものは全体主義の支配の固有の本質として定義することができる」(ET: 954)。もちろんアーレントは、全体主義の初期段階にテロルが敵への粛清や住民監視の手段として有効だと認めている。しかし、それが不要になるとテロルは「無目的」になった。それは意図的にふるわれるテロルではなく、何らかの法則に応じてオートマティックに展開されるテロルである。

アーレントによれば、すべての全体主義運動が主張するのは「世界支配」である。言い換えれば、それは、全体主義支配がある法則に応じて動くような世界を制作できるという主張である。法則とテロルが一体となって人々を支配した結果、すべての出来事の原因を説明できるかのごとく首尾一貫した「虚構の世界」がテロルのおかげで作られ維持されうる。したがって、全体主義の第一の特徴はその本質がテロルであり、何らかの法則に従って自動的かつ継続的にテロルが行われる点にある。

アーレントは全体主義運動が多くの国で起こったが、全体主義支配にまで至った国はドイツとソ連だけとし、指導者のヒトラーやスターリンは暴君ではないと考える。それは彼らの究極目的が支配の安定ではなく、自然あるいは歴史の法則を模倣したり解釈したりすることにあつたからである。この独裁的な「一者」は支配者であるかのように見えるが、彼らは恣意的権力

を持った自由な行為者ではない。彼らは法則の命令を遂行する者であり、支配される側の一員なのである。

(D2) について、アーレントは以下のように述べている。

もし、全体主義の支配が暴政の近代的形態以外の何ものでもないとするならば、この支配は人間の政治的領域を破壊することだけで満足したのであろう。しかし、この支配はそれでは満足しないのであって、支配される人々の私的および社会的領域をも破壊させることを目標とする。それらの領域をも破壊することで真に人々を全体的に支配できるといえるからである。(ET: 974-975)

つまり、暴政などの従来の専制支配は人間の政治的領域を破壊することにとどまった一方、全体主義支配は私的領域をも破壊しようとした。全体主義のテロルは、「自由な空間のみならず、暴政に特有のあの孤絶と相互不信の砂漠をさえ消滅させてしまう」(ET: 958)。暴政が孤立化を求めるのに対して、全体主義は他者からも自己からも「見捨てられた状態」(Verlassenheit) になることを人びとに要求したのである。

アーレントは官僚制に関しても、支配の対象となる領域によってそれが全体主義的かどうかを明確に分けている。彼女は全体主義的官僚制について、「市民のあらゆる問題を私的なものであれ公的なものであれ、精神的なものであれ外的なものであれ、同じ一貫性と残虐さをもって統制する術を心得ていた」(ET: 520) と述べている。政治的な自発性や創造性のみを消し去ることを目的とした旧式の官僚制支配とは異なり、全体主義的官僚制は人間のすべての領域にある自発性や創造性を排除しようとする。

(D2) は人間性にかかわる重要な定義である。私的領域とはいわば家政の領域である。公的領域では行為が、私的領域では労働 (Arbeit) や制作がおこなわれる。前者が政治的かつ自由の領域であるとすれば、後者は自然または必然の領域である。私的な生活は古代ギリシアでは愚かしいものとみなされ、また古代ローマにおいては、公的なものからの一時的な逃避の場であると考えられていた。<sup>⑧</sup>

だが、私的領域に対するアーレントの態度はネガティブなものばかりではない。佐藤 (2017) は、アーレントの「私的所有の問題」を従来のアーレント研究は無視しているが、この問題抜きの「人間の条件」の研究はありえないと述べている。<sup>⑨</sup> 篠原 (2011) は、アーレントの政治理論が「権利をもつ権利」という私的なものを基礎においているため、彼女の示す政治体は「たんに公共的なものというだけでは捉えきれない射程をもつものだった」(篠原2011: 120) とみなしている。

私的領域は公的領域の単なる対概念という意味だけを持つのではない。このことについて、アーレントは以下のように述べている。

というのも、古代の政治思想にとってすら、「私的」という語は、財産と関連づけられて、まさに私有財産として現われる場合には、欠如的性格を失い、もはや公的なものと無条件的には対立しなくなるからである。財産のもつ一定の性質は、私的な本性のものであらうとも、政治的なものにとって最高度に本質的なものであるのは、明らかである。

(VA : 75-76)

つまり、政治的なものに密接にかかわる「財産」<sup>⑩</sup>が私的領域にはあるため、私的なものに欠如的性格だけが認められるのではない。財産とは、世界のなかでの一定の位置を占める不動産であると同時に、その場所を占める家族のことも意味しており、神聖さをも備えていた。この神聖さとは誕生と死の神聖さである。誕生や死は私的なものであるが、欠如的というよりは、公的なものから隠されるべきものとして特徴づけられる。それゆえ、私的領域とは欠如の空間であると同時に「秘匿性 (Verborgenheit) の場所」でもある。この秘匿的な性格のおかげで、私的領域に属することが人間であるための条件になる。

全体主義は公的領域も私的領域も壊してしまうことで、人間が人間として生きることのできる条件をすべて破棄しようとしている。この「生きた屍」<sup>⑪</sup>を作り出すために、人間の法的人格、道徳的人格、裸の人格を順番に殺害していく。法的人格の喪失によって、ひとはあらゆる権利を失い、道徳的人格の殺害のために、ひとは「あの殺人かこの殺人か」という究極の二者択一を強いられる。最後の砦として残る裸の人格は、人間本来のアイデンティティであり、個人的な差異性ともいえる。これを失ったひとは動物種の一個体に過ぎない。人格の観点からみれば、公的領域の破壊が人格の開示を不可能にするのに対して、私的領域の破壊は公的領域に参入する可能性を奪うと同時に、人格そのものを破棄してしまう。

無人支配へのアーレントの批判は、それが最も残酷な全体主義支配を招くということの示唆である。そして、彼女にとっての政治的問題は、単に政治形態のみならず人間性にまでかかわっているのである。

## 第2章 支配概念の排除

無人支配の危険性から、アーレントは政治形態を支配形態として理解すること自体が誤りだと考えた。そして彼女は、「誰が支配すべきなのか」という問いに囚われ続けた政治思想の伝統に立ち向かい、「政治」から「支配」の概念自体を切り離そうと試みる。それは、政治を

「制作」ではなく「行為」で捉えようとする事として表現できる。

### 第1節 支配概念と制作

アーレントによるすべての支配形態に対する批判は、そもそも政治と支配の同一視は誤りであるという見解に基づいている。彼女にとって政治とは「支配することも支配されることもない」<sup>⑫</sup>という意味での自由である。彼女は、古代では支配が政治的な概念ではなく私的な概念であったことに注目する。

われわれ現代人は、支配－被支配、権力－国家－統治といった概念の組み合わせこそ、政治的なものと解しているが、現代のその手の政治的秩序の概念の総体は、かつては逆に、ポリス以前のものと見なされていた。支配－被支配の関係が正当と見なされたのは、公的なものにおいてではなく、私的なものにおいてだった。(VA : 42)

古代において、私的領域に属す奴隷は市民とみなされず、公的領域に参入する権利、すなわち自由の可能性を奪われた。そして私的な家政の領域では、主人が家内奴隷と家族を絶対的権力<sup>⑬</sup>でもって支配していた。

支配が政治的なものとして理解されるようになったのは、政治的領域に特有の「不安定さ」を取り除くために、それが政治に導入されたからである。政治的領域の不安定さは、「無制限性」(Schrankenlosigkeit)と「予測不可能性」(Unabsehbarkeit)という行為の性格に基づく。「無制限性」は、ある過程がさらに新たな過程を生む連鎖の発生である。「予測不可能性」は、行為の結果が明らかになるのは行為の終了後であり、事前にその結果を予測できないことを意味する。これらの性質ゆえに、行為は政治的領域を不安定にさせる。そこで安定した共同生活を得るために、支配を用いて行為を制限し予測できる行いを人びとに要求する理論がつくられ、その正当化に「制作」がもち出された。本来唯一の政治的活動であった行為を、非政治的な活動である制作に置き換えようとする試みが行われたのである。

その試みは以下の根拠より行われた。第一に、行為よりも制作のほうが世界に安定性を与えられるからである。第二に、支配と制作には共通する図式があるということである。

まず、第一の根拠については、制作が他者を必要としないことに拠る。そもそも、公的領域を不安定にさせる「行為の難問」は、「人間の実存が複数性という条件によって制約されていることに帰着する」(VA : 279)。自分の行為が限りなく続き予見することができないのは、行為の結果が他者の反応に依存するためである。したがって、行為のように他者が関わる活動よりも、単独で可能な制作であれば自分のふるまいを制御できる。

また、制作と安定性については制作の本質である「物象化」に示される。「物象化」することで、ある程度の耐久性と永続性を有する物として作られた椅子やテーブルなどは、消費されるための物より長くこの世にとどまるだろう。生命維持に関する「労働」とは異なり、制作は死すべき人間が安らぐための「住み家」をつくる活動である。

アーレントが「世界」と呼ぶ制作の産物は、「欲求や必要をしのいで少なくとも一定期間もちこたえることのできるような「客観的」な対象性」(VA: 162)を持つ。ゆえに、行為の政治の不安定さを克服するならば、制作の政治への転換が有効との考えに至る。

第二の根拠である支配と制作の関係について、アーレントはプラトンが「為すことと知ることの間の裂け目を、支配者と被支配者とを分かち隔たりとただちに同一視したこと」(VA: 283)に注目する。つまり、支配と制作の共通点は、「知ること」と「為すこと」の対立図式が含まれているということである。

制作とは、つくりたい物をイメージしそれを実際に生み出す過程であり、いわば「複製化」である。この点で制作者の経験は、まずモデルを知り、さらにそれを複製するという二段階に分けられる。プラトンの理論では、制作過程を導くモデルであるアイデアは人間精神にあらかじめ与えられていた。結果として、モデルを認識する哲学の営みと、得られたモデルを用いて実際に作ることは別の営みとして理解されることになる。

他方、支配の概念における知ることと為すことの分離は、古代の家政の領域にすでに表れていた。アーレントによれば、「主人にして家長は、為すべきことを知っており、かつ奴隷を十分に所有しているが、奴隷のほうは、主人の指図を実行はするが、自分がそもそも何を為しているかを知る必要はない」(VA: 283)。このように、知ることと為すことの分離は、支配者たる主人と被支配者たる奴隷の分離に対応している。制作と支配の両方に同じ対立図式がある点で、制作と支配は結びつく。

制作と同様に、行為も二段階に分けられる。アーレントは行為を語源的に分析し、ギリシア語で「行為する」を意味する *archein* (始める、先導する) と *prattein* (達成する、完成させる) に注目する。彼女は、この二つの言葉が、行為はまず何かが始め (*archein*) られ、その始められたことを促進し完成させる (*prattein*) という二段階に分けられるということを示すと指摘する。<sup>⑭</sup> 始める人は他者の助けがなければ一つの行為として完成せず、助ける人も始めた人の存在が不可欠である以上、二つの段階は依存している。

行為を制作に置き換える場合、行為の二側面を、支配概念を用いて「支配する人」と「職務を執行する他の人びと」との分類で対応させることができる。そのことは *prattein* がのちに行為一般を表現するようになったのに対して、*archein* が政治的には「支配する」という意味に変化したことに示されるとアーレントは述べている。<sup>⑮</sup>

このように行為と制作の置き換えは、行為の二段階をそれぞれ分断し、支配と被支配という二つの機能に置き換えることでなされた。

## 第2節 アーレントによるプラトン批判

アーレントにとって、行為を制作で置き換えようとする試みを行った最初の人物はプラトンであり、彼に始まる政治哲学の伝統は制作の政治である。プラトンは、行為の二側面を「命令する機能」と「命令を執行する機能」という全く異なる二つの機能へと分離するにあたり、自己支配が十分にできるかどうかに関心を置き、自らの行いに対して主権的となれる人こそが支配者たるべきと考えた。

アーレントはプラトンの理想国家について以下のように指摘する。

『国家』ではまだ、哲学者という人格に支配がじかに要求されるという形で現われていたことが、『法律』では改変させられて、理性ならびに理性によって見てとられたアイデアという非人格的なものに支配が要求されるという形で可能となった。(VA:288)

アイデア論を政治に適用したプラトンは、支配概念から人格的要素を取り除くことを可能にした。主人と奴隷や牧人と家畜が非常に異なった存在であるように、支配する側には神のごとき権威がなければならない。制作者を他の人より優れた存在にさせるのは「名人の人格ではなく、名人が代表して使いこなしている、熟練技術上の尺度にすぎない」(VA:288-289)。プラトンはその尺度を法律とすることで、人格的な権威を何ら必要としなくなった。官僚制の如き人格的要素のない無人支配は近代以降に出現したが、そもそも政治に支配概念を導入した当初から、人格的な権威は支配者の不可欠な要素ではなかったのである。

もう一つの問題は、制作を根拠に政治へ支配概念が導入されることによる「政治の手段化」である。というのも、想定された物を作るプロセスである制作は、最終生産物という目的のための手段でしかない。制作が手段のプロセスである以上、制作の政治は「いっそう高次の目的」(VA:292)を達成するための手段となってしまう。この場合、目的達成に有効であればいかなる手段も正当化できるという考えにまで至りうる。これに対して、制限を設けるだけでは不十分だとアーレントは主張する。彼女は最終手段としての暴力も一切認めない。ヴィラ(2004)が述べるように、アーレントは「目的・手段というカテゴリーの支配を撤廃して、政治的行為の目的論的モデルを転倒させたいのだ」(ヴィラ2004:97)。要するに、目的-支配のカテゴリーを用いることなく政治を考えることが重要なのである。

そもそも制作には暴力行使の要素が含まれている。制作は、自然に対して暴力を加えること

で反自然的な人工物を生み出すことである。そのため、制作の政治においても暴力行使が重要な役割を果たすことになる。

近代までは観想的な生が上位に存在し、活動的生の諸活動はより高次の目的のための手段としかみなされなかった。しかし近代になり、「人間が知ることができるのは人間が作ったものだけである」というヴィーコの真理論に示される制作の優位によって、暴力行使の要素が高まった。<sup>⑬</sup>のちにマルクスが暴力を政治的、歴史的な出来事の「助産師」とみなしたのは、人間によって歴史は「作られる」のだとする「近代全体の根本確信」に対応しているとアーレントは考える。<sup>⑭</sup>結果、政治における暴力行使の正当化、加えて賛美にまで至った。

アーレントは、制作の政治の出発点としてプラトンを強く批判するが、全体主義の起源として位置づけてはいない。彼女の目的は、無人支配の危険を示して支配の政治を否定することである。プラトンの理論は、それ自体が全体主義なのではなく、全体主義支配を生み出しうる土壤であったと考えているのではないだろうか。

ヴィラ（2004）が述べているように、「製作としての政治の最新版である全体主義」（ヴィラ 2004：412）は果てしなく続く種の製造である「人類の製作」をおこなう独特の形態である。プラトンが始めた制作の政治では、人間の相互関係が技術的に制御可能であると考えられた。全体主義では、技術的な制御が人間関係だけでなく人間そのものに対しても可能であると考えられている。その信念は、人間そのものを作りかえ、人びとを「全体的に」支配することで体制を存続しようとする全体主義の目標に表出している。

アーレントの見解では、全体主義の一要素である強制収容所とは、人間を全体的に支配するための実験室である。全体主義支配は「すべては可能である」という原理に基づき、公的領域のみならず私的領域をも破壊し、人びとを非人間的なものに貶めた。アーレントによるプラトン批判は、彼の制作に基づく政治理論にこそ向けられている。彼女は行為によって生じる予測不可能な出来事を保護するために政治的支配を拒絶し、政治的な活動が制作ではなく行為であることを示そうとした。

### 第3章 出生性の哲学に基づく政治理論

本章では、行為の概念と密接な関係にある「出生性」という概念に注目する。前述のように、出生性とは人間の誕生に対応する人間の条件であり、新しい存在の誕生を意味している。行為の「始まり」の要素は出生性に密接に結びついているのであり、出生性のおかげで人間は予測不可能な新しい出来事を起こすことができる。アーレントによれば、行為を制作の様式で考えると、それが新しいことを始める能力であることを捉え損ねてしまう。ベーア（2002）が指摘しているように、アーレントの社会学および社会科学に対する批判のポイントは、社会学の用

語や方法、予測が政治的新奇性（political novelty）の認識を妨げた点にある。<sup>⑮</sup>そこで、アーレントの政治科学批判をもとに、予測不可能な新しい出来事存在が出生性と結びつけて考えられていることを示す。

## 第1節 制作と科学

アーレントは政治と科学の関係を以下のように表現する。

人間事象に係わってくる問題では、科学者としての科学者を信用するわけにはいかないが、その理由とはいえば、科学者が原子爆弾を作り出すことに賛同したからではないし、……原子爆弾を使用すべきかどうか、またそれはどのような形でか、に関して問い合わせを受けるにちがいないと、素朴に思い込んでいたからでもない。はるかに重大なのは、科学者の活動している場がそもそも、言語を失った世界であり、言語を駆使しようのない世界だという、こちらの問題のほうである。（VA：11-12）

科学者は本性的に公的領域に現われることができないため、ひとが科学者として政治的な行為をすることは不可能である。それは、科学者の領域が言論なき空間だからである。行為に必ず伴う言論の特徴は、行為者の人格を開示するような独特で比類のない言葉である。言葉はあらゆる活動に伴うが、行為以外において言葉は二次的であり、言語は情報伝達にとって便利な手段でしかない。そこで、より伝達しやすくするために数学的な記号言語を使用する科学は、言論のない私的領域に位置づけられるのである。

自然科学のもう一つの特徴は、科学は近代以降、自然を認識するために実験を重ねてきたことである。実験には制作の要素が含まれており、「自然発生的プロセスを人工的条件のもとで模倣しようとする試み」（VA：381）である。つまり、目的となるプロセスの「再現」が実験である。目的となる対象物の「複製」が制作の本性にあることから、実験は制作の一種である。

このような政治と科学の隔たりにもかかわらず、それらは結びつけられてきた。近代自然科学の成果を「計算して制作する」という考えを用い、人間の領域に適用しようとする政治科学の始まりを、アーレントはホップズに見いだす。言い換えれば、近代の政治哲学は「科学的精密さで政治制度を作り出せる理論を見いだそうとする試み」（VA：380）である。それは、予測不可能な出来事が起こるのを科学的な仕方では制御可能にしようとした。そして、機械的、生物学的なイメージで国家が理解され、その人工的な生き物を制作する方法が求められた。政治的領域が出来事であふれている以上、政治科学はそれを消し去り、ある程度予測可能なことで構成されるよう作り変えようとする。そのため、政治科学も「制作の様式で行為する」（VA：

382) ことを要求する制作の政治になる。

しかし政治科学という制作の政治の特徴は、従来のそれとは性格を異にする。手段と目的の категория に属す制作は、あくまでも「目的のための手段」であった。それゆえ、対象物として生み出される世界を目的として、その目的に導かれながら制作のプロセスは進行していた。つまり、近代では目的と手段の関係が狂ってしまったのである。自然科学的研究において、目的としての発生物が「何」であるかということよりも、「いかに」して発生したのかという発生過程、すなわち手段のほうが探求されるようになった。手段と目的の重点移動がおり、その結果、制作はモデルに導かれるのではなく、むしろプロセスに導かれるようになったのである。

アーレントは「今日においてでさえ、研究者の見解は科学的成果の技術的应用可能性は副次的意味しかもたないという点ではもちろん相変わらず一致している」(VA: 378-389) と述べる。つまり、現代科学もまた、生み出すことではなく知ることを目的とした手段のプロセスとしての制作なのである。<sup>19)</sup>

ベアの見解と同じくウォルシュ (2015) も、アーレントの批判が予期せぬ出来事を理解し損ねている近代科学に向けられていると主張する。さらにウォルシュは、アーレントのマンハイム批判とマルクス批判から、社会科学の次のような二つの誤りをアーレントが考えていると指摘する。<sup>20)</sup>一つは、行為の能力としての「始める能力」の不理解であり、もう一つは「出来事」(Ereigniss) をプロセスの一部として理解することである。アーレントが全体主義分析のなかで最も強調したことは、全体主義は「先例のない」現代の現象であって、既存の支配形態では理解できない現象だということである。社会学者たちは全体主義の先例のなさに注目せず、伝統的なカテゴリーでそれを理解しようとしていることに彼女は不満を抱いていたのである。

## 第2節 出生性に由来する予測不可能性

アーレントの社会科学批判は、新奇性の不理解に向けられていた。彼女によれば、新たに始める能力は人間の創造性ではなく出生性にこそ由来する。

始めることの能力は出生性 (natality) に根拠があるのであって、決して創造性 (creativity) に根拠があるのではない。つまり天賦の才にではなく、人間存在は新しい人間として、誕生によってつぎつぎと世界の中に現象する、という事実に根拠があるのである。(LM: II-217)

行為が出生性と密接に結びついていることはすでに示した。この点から、彼女は出生性が政

治的に重要な意義を持つと考<sup>21</sup>えている。行為とは新たな始まりを生み出すことであり、人間の誕生もそれ自体一つの新しい始まりなのである。

前述のように、社会学者による新奇性の不理解を示すしは、全体主義の先例のなさを捉え損ねることに見えるとウォルシュ（2015）が指摘していた。例えば、ポパーは世界における新奇性の重要性を認めつつ、「ピースミール社会工学」という方法を提示した社会学者である<sup>22</sup>。ポパーの分析では、プラトンやヘーゲル、マルクスの理論が全体主義のものと同一であったことが強調されている<sup>23</sup>。この点に関してバックマン（2020）が正しく指摘するように、全体主義の始祖をプラトンに見るポパーと異なり、アーレントはプラトンの理論自体が全体主義と同一とは考<sup>24</sup>えていない。プラトンから続く政治哲学の伝統はマルクスで終わったとアーレントは主張している。バックマンは、ポパーの全体主義解釈に比べて、「全体主義の重要な要素の歴史的成熟についてのアーレントの解釈はより洗練されており、微細的であり、歴史的詳細に対して注意深いものである」（Backmann 2020：170）と述べている。ポパーはプラトンの政治プログラムが全体主義プログラムであるとし、20世紀の全体主義が先例のない現象であるとは考<sup>25</sup>えない。アーレントからすれば、ポパーは社会における新奇性を捉え損ねているといえるであろう<sup>26</sup>。

アーレントは、新しいものが生まれることを一人の人間の誕生としての始まり（initium）を通して理解している。

人間誰しも、生まれたということを根拠として、一個の initium つまり始まりであり、この世における一個の始まりにして新参者なのである。（VA：215）

人間は、比類なき人格と呼べる「誰か」として生まれる。つまり「あらゆる人間は、単独者として創造されているのであって、人間の誕生のおかげで一つの新たな始まりなのである」（LM：Ⅱ-109）。

人間とは異なり、動物の誕生は一つの新たな始まりとはみなされない。アーレントはアウグスティヌスを援用しながら、「人間の創造以前に創られた動物については、それらは人間と違って、「群れとして」類的存在として創造された」（LM：Ⅱ-109）点に注目する。ただ、人間も動物種として、人類としてみれば類的存在となる。

マルクスの言葉を借りると「類的存在」とって、個々人の生命の再生産は、動物種としての人類の生命プロセスのうちに埋没してしまう。だとすれば、人間がもはや私人として行為するのではなく、むしろ「類的存在」として行為する場合にはじめて、「社会化さ

れた人類」の集合的な生命プロセスは、当のプロセスに内属する必然性の法則に沿った仕方  
方で展開しうる。言いかえれば、個人の生命を途方もなく複製して増殖させるとともに、  
……多産性の自動機構を解き放つことができるのである。(VA : 136)

人間を類的存在としてみれば、個々人の誕生は「生命の再生産」でしかない。これでは、人間がまったく新しい存在として生まれてくるという視点が欠けてしまう。再生産の結果たる個々人に見いだされるのは、「唯一無比性」(Einzigkeit)ではなく「類的単一性」である。類的単一性の観点では、「同類のどの個物も、他の個物とそっくりであるがゆえに交換可能なほどである」(VA : 146)。人類の観点では、個々人の死や誕生は重大な出来事ではない。誕生が始まりとならない以上、「類の生命プロセスは、全体として見れば、各個体の誕生と死によって中断されることもない」(VA : 146) わけで、個々人の差異など取るに足らず、再生産によって個人を交換して「人類」を存続させればよい。

この点への反論は、「個々の人間が生命をそなえているのは種の繁殖のためにではなくて、出生のため、すなわち新たな生命が入り込んでくるためだという事実」(LM : II-217) である。アーレントにとって「出生性」という条件が非常に重要であるのは、誕生とはプロセスを中断する新たな始まりであり、人格の始まりだからである。誕生自体が予測不可能な新しい始まりなのであって、第二の誕生たる行為は第一の誕生に根拠を置いているのである。

しかし森川 (2010) が明らかにしているように、アーレントは当初、予測不可能な新たな始まりを行為ではなく制作の様式で捉えていた。始まりの捉えなおしは、1951年の『全体主義の起原』初版と「イデオロギーとテロル」(1955年のドイツ語版に追加された章)の間で決定的に現われている<sup>⑦</sup>。いずれも「始まり」が重要な概念として提示されているものの、意味が異なる。前者では、始まりが「自覚的に」新しい政治体を考案し建設することや、救済の瞬間として理解されている。一方後者において、始まりは「創り出される」ものではなく「出来事」として、さらには「一人ひとりの新たな誕生」として理解されている。そして、始まりは世界に到来し続けているのであって、救済の瞬間は必要ないと考えられている<sup>⑧</sup>。

アーレントは行為と制作を区別しようとしたにもかかわらず、始まりを制作の様式で捉え、「新たなモノを世界に——まるで無からの創造であるかのように——出現させる「瞬間」と同一視してしまう」(森川2010 : 288) デイレンマに陥っていた。だが彼女は、始まりを一人ひとりの誕生という出来事を意味する始まり (initium) として捉えなおし、ディレンマを克服した。そして彼女は、この捉えなおしから『精神の生活』に至るまで、一貫して initium と principium の区別および人間が生まれてくるということの重要性を強調したのである。

予測不可能な新しいことが世界で起こるのは、人間の創造性ゆえではなく、人間一人ひとり

の誕生に由来する。新しい人間が次々と生まれ、世界に登場してくるという事実こそ重要であり、誕生によって予測不可能な出来事が絶えず起こり、世界は常に新たな世界であり続ける。この認識の下、世界のうちで起こることのすべてを説明、予測できるなどと断言はできないだろう。全体主義の理想とする世界は、人間が出生性の条件を備えている限り不可能である。人間一人ひとりの誕生が人間の単なる再生産にならない限り、新しい生命の到来によって世界は更新され続ける。

もちろん世界のうちには人間の誕生以外による始まりも起こる。「地球上に有機的生命が発生したこと、動物の類的進化の過程が人類の発生に及んだこと」(VA: 216)なども予測不可能な「ありそうもないこと」である。

われわれ地球の生命のリアリティが基づく「およそありそうもないこと」と、歴史的なリアリティを樹立する出来事に内在する奇蹟ともいえる性格との間には決定的な違いがあり、われわれは人間の事柄の領域においては「奇蹟」の作者を知っている。奇蹟を実演するのは人びと、自由および行為という二つの天分を受けとっているがゆえに、自ら自身のリアリティを樹立できる人びとなのである。(BPF: 169)

世界に生じる予測不可能なことの中で、人間が起こす奇蹟の特徴とはその作者が示されていることである。つまり、人格が開示されているか否かで自然的な「ありそうもないこと」と人間の「始まり」は区別されている。後者は二種の誕生によって繰り返し起こる。一つは新たに子どもが生まれてくるという受動的な誕生であり、もう一つは積極的に始まりをもたらす行為としての第二の誕生である。

以上から、始めるという能力は制作ではなく行為であり、予測不可能な出来事は人間の創造性ではなく出生性にこそ由来するのである。

### おわりに

アーレントが「支配」の概念を政治的なものから取り除こうとしたのは、制作の政治を否定し、行為の政治を救い出すためであった。政治思想の伝統は制作の政治に囚われ、新しい支配形態である全体主義の発生を招いた。現代の政治科学でも政治は制作の様式で考えられており、制御という目的のうちにも支配の考えがあると彼女は批判した。全体主義への反省から、単に政治のあるべき姿として民主主義を認めればよいわけではない。彼女が民主主義に懐疑的な態度を示したのは、それが全体主義に変わりうるからである。だからこそ、彼女は政治理論を「誰が支配するか」という問いの解決として考えることを否定した。

アーレントにとっての〈支配の問題〉とは以下の点にある。本来予測不可能な出来事であふれる世界が、支配によって予測可能な世界につくりかえられ、政治目的のために暴力の使用が容認される。そして究極的には、予測不可能性の不理解を引き起こすゆえに、人間の出生性という条件が破棄される可能性がある。

人間の条件は人間の本質ではないのであって、人間は既存の諸条件によって今後も変わらずに条件付けられているとは限らない。出生性という根本的な条件ですら失われてしまうかもしれないのである。強制収容所は生きる屍を製造し、人間を「繁殖」によって条件付けられた動物種へと変える試みが行われた場所であった。そこでの人間は、死ぬまで同じような反応や行動を繰り返すだけの存在になる。アーレントが政治から支配概念を排除しようとしたのは、人間のよりよい相互共存のあり方を求めただけでなく、人間性が消滅する可能性を回避するためでもあったのではないだろうか。

アーレント自身は政治理論家として、政治と哲学は分離して考えられるべきだと述べていた。しかし私の見解では、彼女の思想において、政治と哲学は明確に分離されてはいないように思われる。ただし、政治と哲学の一体化を目指したプラトンとは異なり、彼女は政治と哲学の間にある緊張を意識しながら政治理論を展開した。また、これまでの哲学は可死性に注目することで展開されてきたが、彼女は出生性を強調することで新たな政治哲学のありかたを模索した。アーレントの支配批判から見えてくる独創性は、出生性の哲学に基づいた政治哲学にこそあると考えられる。

## 文献表

### 一次文献

- ・ハンナ・アーレントの著作については、以下の略号で示した。
- ・引用については原典のページ数を示し、訳文は既存の邦訳書を参考にした。ただし、場合には、引用者の判断で訳文を一部変更している。

BPF: *Between Past and Future*, Penguin books, 2006. 邦訳: 『過去と未来の間 政治思想への8 試論』 引田隆也、斎藤純一訳、みすず書房、1994。

DT: *Denktagebuch 1950-1973*, ungekürzte Taschenbuchausgabe, Piper, 2022. 邦訳: 『思索日記 I、II』 青木隆嘉訳、法政大学出版局、2006。

ET: *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft Antisemitismus, Imperialismus, totale Herrschaft*, ungekürzte Taschenbuchausgabe, Piper, 1986. 邦訳: 『全体主義の起原 1 反ユダヤ主義』 大久保和郎訳、みすず書房、2017。『全体主義の起原 2 帝国主義』 大島通義、大島かおり訳、みすず書房、2017。『全体主義の起原 3 全体主義』 大久保和郎、大島かおり訳、みすず書房、2017。

EU: *Essays in Understanding: 1930-1954*, Jerome Kohn (ed.), Schocken Books, 1994. 邦訳: 『アーレント政治思想集成 1 組織的な罪と普遍的な責任』 斎藤純一、山田正行、矢野久美子訳、みすず書房、2002。『アーレント政治思想集成 2 理解と政治』 斎藤純一、山田正行、矢野久美

子訳、みすず書房、2002。

HC : *The Human Condition*, 2nd edition, The University of Chicago Press, 2018. 邦訳：『人間の条件』志水速雄訳、ちくま書房、1994。

VA : *Vita Activa Oder Vom Tätigen Leben*, ungekürzte Taschenbuchausgabe, Piper, 2002. 邦訳：『活動的生』森一郎訳、みすず書房、2015。

LM : *The Life of the Mind*, Harcourt, 1978. ※第一部は「I」で、第二部は「II」で示す。邦訳：『精神の生活（上）思考』佐藤和夫訳、岩波書店、1994。『精神の生活（下）意志』佐藤和夫訳、岩波書店、1994。

PP : *The Promise of Politics*, ed. & intro. Jerome Kohn, Schocken Books, 2005. 邦訳：『政治の約束』高橋勇夫訳、筑摩書房、2015。

ヴィーコ（2022）『学問の方法』上村忠男、佐々木力訳、岩波書店。

Popper, Karl. (2002a) *The Open Society and Its Enemies: Volume one, the spell of Plato*, Routledge. 邦訳：『開かれた社会とその敵 第一部 プラトンの呪縛』内田諱夫、小河原誠訳、1980。

——— (2002b) *The Open Society and Its Enemies: Volume two, Hegel and Marx*, Routledge. 邦訳：『開かれた社会とその敵 第二部 予言の大潮：ヘーゲル、マルクスとその余波』小河原誠、内田諱夫訳、1980。

## 二次文献

Backman, Jussi. (2020) "Politics of the Idea: (Anti-) Platonic Politics in Arendt and Badiou", *Comparative and Continental Philosophy*, Volume 12, Issue 3, 168-181.

Baehr, Peter. (2002) "Identifying the Unprecedented: Hannah Arendt, Totalitarianism, and the Critique of Sociology", *American Sociological Review*, Vol. 67, No. 6, 804-831.

d'Entrèves, M. Passerin (1994) *The Political Philosophy of Hannah Arendt*, Routledge.

Walsh, Philip. (2015) *Arendt contra sociology: Theory, society and its science*, Ashgate.

ヴィラ、デーナ・リチャード（2004）『アーレントとハイデガー 政治的なものの運命』青木隆嘉訳、法政大学出版局。

佐藤和夫（2017）『「政治」の危機とアーレント——『人間の条件』と全体主義の時代——』大月書店。

関雅美（2004）『ポパーの科学論と社会論』勁草書房。

篠原雅武（2011）「アーレントの思想における「権利をもつ権利」の検討」『社会思想史研究』（35）, 118-136。

寺島俊穂（1990）『生と思想の政治学——ハンナ・アレントの思想形成』芦書房。

———（2006a）『ハンナ・アレントの政治理論——人間的な政治を求めて——』ミネルヴァ書房。

———（2006b）「ハンナ・アレントの政治概念の再考」『関西大学法學論集』55巻、4-5号、955-998、関西大学法学会。

橋爪大輝（2022）『アーレントの哲学 複数的な人間の生』みすず書房。

森一郎（2008）『死と誕生 ハイデガー・九鬼周造・アーレント』東京大学出版。

森川輝一（2010）『〈始まり〉のアーレント——「出生」の思想の誕生』、岩波書店。

リンス、ホアン（1995）『全体主義体制と権威主義体制』高橋進監訳、法律文化社。

# 注

- ① アーレントはギュンター・ガウスとの対話で、自らを哲学者とは考えないと強く主張している。彼女によれば、哲学と政治は緊張関係にあり、カントなどの少ない例外を除けば、哲学者には政治への敵意があった。それゆえアーレントが「哲学と決別した」と考えていたのは、政治への敵意を共有せず、哲学を通して政治的問題を理解しようとはしないということである（cf. EU : 1-2）。
- ② 『人間の条件』（*The Human Condition*）のドイツ語版である『活動的生』（*Vita Activa Oder Vom Tätigen Leben*）は、アーレントの友人が粗訳したものに、アーレント自身が大幅に加筆修正を加えて出版された。本論文では、ドイツ語版を基本的に使用しているが、参考として英語版も使用した。
- ③ Cf. 寺島2006a : 113-117
- ④ Cf. 森2008 : 209
- ⑤ Cf. ET : 946-947
- ⑥ Cf. BPF : 25-26
- ⑦ Cf. リンス1995 : 21-22
- ⑧ Cf. VA : 48
- ⑨ Cf. 佐藤2017 : 58
- ⑩ 「私的財産」や「所有」とも言い換えられる。
- ⑪ Cf. ET : 921-931
- ⑫ Cf. VA : 42
- ⑬ Cf. VA : 36
- ⑭ Cf. VA : 235
- ⑮ Cf. VA : 235
- ⑯ ヴィーコは『学問の方法』で、真なるもの（verum）は作られたもの（factum）であるという原理を示した（ヴィーコ2022 : 40, 41）。アーレントはしばしばこの原理を17、18世紀の特徴の一つとしてあげている。
- ⑰ Cf. VA : 290
- ⑱ Cf. Baehr 2002 : 805
- ⑲ ダントレーヴが指摘しているように、プロセスのカテゴリーに結びつけられたあらゆることを、アーレントはネガティヴに考えているのではない（cf. d'Entrèves 1994 : 56-58）。
- ⑳ Cf. Walsh 2015 : 58-59
- ㉑ Cf. VA : 18
- ㉒ 関（2004）が指摘しているように、ポパーにとって「支配者の権力を制御する制度の問題こそが政治理論の根本問題」（関2004 : 175）であって、民主主義は「政治権力制御制度」である。ポパーの理論は、支配概念から脱却しきれていない制作の政治とみなされうる。
- ㉓ Cf. Popper 2002a : 93
- ㉔ Cf. Backmann 2020 : 169-170, 173
- ㉕ バックマンはアーレントとポパーの全体主義分析を比較して、アーレントがより歴史的に詳細な記述をしていると主張している。同様に、ポパーと比べてアーレントの全体主義分析が歴史的なものであることは寺島（2006b）も指摘している。ただし寺島は、ポパーがもっぱら思想のレベルで全体主義を批判しているのに対し、アーレントは政治的事象そのものを分析の対象とした歴史的な全体主義批判であるところに両者の違いを認めている（cf. 寺島2006b : 956）。

- ②⑥ 実際アーレントとは反対に、ポパーは社会で予測不可能なことが常に多く存在するのは人間の「創造力」のおかげであると考えている。
- ②⑦ Cf. 森川（2010）：284-285
- ②⑧ 始まりの捉えなおしは、とくに『思索日記』の1952年5月の記述に示されている（cf. DT：208）。